マグノリアの木

宮澤賢治

霧がじめじめ降っていた。

諒安は、その霧の底をひとり、険しい山谷の、刻みを渉って行きました。

沓の底を半分踏み抜いてしまいながらそのいちばん高い処からいちばん暗い深いところへまたその谷の底から霧に吸いこまれた次の峯へと一生けんめい伝って行きました。

もしもほんの少しのはり合で霧を泳いで行くことができたら一つの峯から次の巌へずいぶん雑作もなく行けるのだが私はやっぱりこの意地悪い大きな彫刻の表面に沿ってけわしい処ではからだが燃えるように

なり少しの平(たい)らなところではほっと息(いき)をつきながら地面(じめん)を這(は)わなければならないと諒安は思いました。

全(まった)く峯にはまっ黒のガツガツした巌が冷(つめ)たい霧を吹(ふ)いてそらうそぶき折角(せっかく)いっしんに登(のぼ)って行ってもまるでよるべもなくさびしいのでした。

それから谷の深い処には細(こま)かなうすぐろい灌木(かんぼく)がぎっしり生えて光を通すことさえも慳貪(けんどん)そうに見えました。

それでも諒安(りょうあん)は次(つぎ)から次とそのひどい刻(きざ)みをひとりわたって行きました。

何べんも何べんも霧(きり)がふっと明るくなりまたうすく

らくなりました。

けれども光は淡く白く痛く、いつまでたっても夜にならないようでした。

つやつや光る竜の髯のいちめん生えた少しのなだらに来たとき諒安はからだを投げるようにしてとろとろ睡ってしまいました。

（これがお前の世界なのだよ、お前に丁度あたり前の世界なのだよ。それよりもっとほんとうはこれがお前の中の景色なのだよ。）

誰かが、或いは諒安自身が、耳の近くで何べんも斯う叫んでいました。

（そうです。そうです。そうですとも。いかにも私の景色です。私なのです。だから仕方がないのです。）
諒安はうとうと斯う返事しました。

（これはこれ
　惑う木立の
　　中ならず
　しのびをならう
　春の道場）

どこからかこんな声がはっきり聞えて来ました。
諒安は眼をひらきました。霧がからだにつめたく浸み込むのでした。

全く霧は白く痛く竜の髯の青い傾斜はその中にぼんやりかすんで行きました。諒安はとっととかけ下りました。

そしてたちまち一本の灌木に足をつかまれて投げ出すように倒れました。

諒安はにが笑いをしながら起きあがりました。

いきなり険しい灌木の崖が目の前に出ました。

諒安はそのくろもじの枝にとりついてのぼりました。くろもじはかすかな匂を霧に送り霧は俄かに乳いろの柔らかなやさしいものを諒安によこしました。

諒安はよじのぼりながら笑いました。

その時霧は大へん陰気(いんき)になりました。そこで諒安は霧にそのかすかな笑(わら)いを投(な)げました。そこで霧はさっと明るくなりました。

そして諒安はとうとう一つの平(たい)らな枯草(かれくさ)の頂上(ちょうじょう)に立ちました。

そこは少し黄金(きん)いろでほっとあたたかなような気がしました。

諒安は自分のからだから少しの汗(あせ)の匂(にお)いが細い糸のようになって霧の中へ騰(のぼ)って行くのを思いました。その汗という考から一疋(ぴき)の立派(りっぱ)な黒い馬がひらっと躍(おど)り出して霧の中へ消(き)えて行きました。

霧が俄かにゆれました。そして諒安はそらいっぱいにきんきん光って漂う琥珀の分子のようなものを見ました。それはさっと琥珀から黄金に変りまた新鮮な緑に遷ってまるで雨よりも滋く降って来るのでした。

いつか諒安の影がうすくかれ草の上に落ちていました。一きれのいいかおりがきらっと光って霧とその琥珀との浮遊の中を過ぎて行きました。

と思うと俄かにぱっとあたりが黄金に変りました。

霧が融けたのでした。太陽は磨きたての藍銅鉱のそらに液体のようにゆらめいてかかり融けのこりの霧は

まぶしく蠟(ろう)のように谷のあちこちに澱(よど)みます。
（ああこんなけわしいひどいところを私は渡(わた)って来たのだな。けれども何というこの立派(りっぱ)さだろう。そしてはてな、あれは。）
諒安は眼(め)を疑(うたが)いました。そのいちめんの山谷の刻(きざ)みにいちめんまっ白にマグノリアの木の花が咲(さ)いているのでした。その日のあたるところは銀(ぎん)と見え陰(かげ)になるところは雪のきれと思われたのです。
（けわしくも刻(きざ)むこころの峯々(みねみね)に　いま咲きそむるマグノリアかも。）斯(こ)う云(い)う声がどこからかはっきり聞えて来ました。諒安は心も明るくあたりを見まわしま

した。
すぐ向(むこ)うに一本の大きなほおの木がありました。その下に二人の子供(こども)が幹(みき)を間にして立っているのでした。（ああさっきから歌っていたのはあの子供らだ。けれどもあれはどうもただの子供らではないぞ。）諒安(りょうあん)はよくそっちを見ました。
その子供らは羅(うすもの)をつけ瓔珞(ようらく)をかざり日光に光り、すべて断食(だんじき)のあけがたの夢(ゆめ)のようでした。ところがさっきの歌はその子供らでもないようでした。それは一人の子供がさっきよりずうっと細い声でマグノリアの木の梢(こずえ)を見あげながら歌い出したからです。

「サンタ、マグノリア、
枝（えだ）にいっぱいひかるはなんぞ。」
向（むこ）う側（がわ）の子が答えました。
「天に飛（と）びたつ銀（ぎん）の鳩（はと）。」
こちらの子がまたうたいました。
「セント、マグノリア、
枝にいっぱいひかるはなんぞ。」
「天からおりた天の鳩。」
諒安はしずかに進（すす）んで行きました。
「マグノリアの木は 寂静印（じゃくじょういん） です。ここはどこですか。」

「私たちにはわかりません。」一人の子がつつましく賢こそうな眼をあげながら答えました。

「そうです、マグノリアの木は寂静印です。」

強いはっきりした声が諒安のうしろでしました。諒安は急いでふり向きました。子供らと同じなりをした丁度諒安と同じくらいの人がまっすぐに立ってわらっていました。

「あなたですか、さっきから霧の中やらでお歌いになった方は。」

「ええ、私です。またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたが感じているのですから。」

「そうです、ありがとう、私です、またあなたです。なぜなら私というものもまたあなたの中にあるのですから。」

その人は笑いました。諒安と二人ははじめて軽く礼をしました。

「ほんとうにここは平らですね。」諒安はうしろの方のうつくしい黄金の草の高原を見ながら云いました。

その人は笑いました。

「ええ、平らです、けれどもここの平らかさはけわしさに対する平らさです。ほんとうの平らさではありません。」

「そうです。それは私がけわしい山谷を渡(わた)ったから平らなのです。」

「ごらんなさい、そのけわしい山谷にいまいちめんにマグノリアが咲(さ)いています。」

「ええ、ありがとう、ですからマグノリアの木は寂静(じゃくじょう)です。あの花びらは天の山羊(やぎ)の乳(ちち)よりしめやかです。あのかおりは覚者(かくしゃ)たちの尊(とうと)い偈(げ)を人に送(おく)ります。」

「それはみんな善(ぜん)です。」

「誰(だれ)の善ですか。」諒安はも一度(いちど)その美(うつく)しい黄金の高原とけわしい山谷の刻(きざ)みの中のマグノリアとを見なが

らたずねました。
「覚者の善です。」その人の影(かげ)は紫(むらさき)いろで透明(とうめい)に草に落(お)ちていました。
「そうです、そしてまた私どもの善です。覚者の善は絶対(ぜったい)です。それはマグノリアの木にもあらわれ、けわしい峯(みね)のつめたい巌(いわ)にもあらわれ、谷の暗(くら)い密林(みつりん)もこの河(かわ)がずうっと流(なが)れて行って氾濫(はんらん)をするあたりの度々(たびたび)の革命(かくめい)や饑饉(ききん)や疫病(やくびょう)やみんな覚者の善です。けれどもここではマグノリアの木が覚者の善でまた私どもの善です。」
諒安とその人と二人はまた恭(うやうや)しく礼をしました。

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店
１９９６（平成８）年６月25日発行改訂新版
底本の親本：「新校本　宮澤賢治全集」筑摩書房
１９９５（平成７）年５月発行
入力：浜野智
校正：浜野智
１９９９年１月31日公開
２００８年８月４日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。